

『Actes』誌の「ハムスター」

—ブルデュー氏を偲んで—

稲賀繁美

ブルデューに送った小論

一九八一年秋のこと。仏政府給費留学生として渡仏した。ピエール・ブルデューは、阿部良雄氏の薫陶により、留学以前から読み耽っていた『デイスタンクシオン』はジベール書店に平積み。翌年初冬には『話すということ』が登場。『ル・モンド』の書評には「明晰さと自由の教訓」とあり、紙面にはコレージュ・ド・フランスに収まる前の、黒髪に不精髭の、活力溢れる精悍な著者の顔があった。

モンパルナスの古本屋には、ブルデューが主宰する雑誌『社会科学研究論

叢』(Actes de la recherche en sciences sociales)のバック・ナンバーが安く積んであった。「眼の社会学」と題する特集号が目にとまる。マイケル・バクサンダーの「クワトロチェントの目」、エンリコ・カステルヌオ・ヴォ、カルロ・ギンズブルグの「イタリア美術史における芸術地理と象徴支配」ほか、選球眼の良さも歴然。序をなす「知覚の社会学のために」を読むや、これだ、といった直感に駆られて、幼稚な仏文タイプの小説を、同誌編集部あてに郵送した。欧州と徳川日本の文化交流における、視覚世界の変貌を扱った小論。パリ第一大学・大学院

授業の発表原稿だった。

『Actes』誌に掲載された拙論

一月ほどすると、ラスパイユ街の「人間科学の家」(La Maison des sciences de l'homme)の封筒で返信があった。開いてみると、編集長ブルデュー直筆の手紙が同封されている。近くまた芸術特集号を編む予定であり、「貴稿」も掲載したい由。多くのフランス・インテリの、あの判読不可能な悪筆とは比較にならない。それは端正な能筆だった。一緒に送り返された拙稿には、4Bの鉛筆で簡潔かつ絶妙な斧正が、すでに完璧に施されていた。後で何かの機会に感謝を口にした。「誰にでもしていることですから」。さりげない返事が、微笑混じりに戻ってきた。八三年秋に特集「絵画とその公衆」が書店に並ぶ。スヴェトラナ・アルパースの『記

述の芸術』の抜粋に先立ち、ダリオ・ガンボニーの現代美術偶像破壊論と、ナタリー・エニックによる十七世紀アカデミーの透視図法論争考。巻末にはエニックの卓抜なベンヤミン批判とフランシス・ハスケルの博物館制度論。今日から見ても、新しい動向に敏感で、一本筋の

通った布陣である。だがそれ以上に、初夏、「人間科学の家」にある編集部を訪れた記憶が鮮明だ。深刺とした活気なのか、女性たちが生き生きと立ち働いている。画期的な経費節約に成功した学術誌製作の現場には、社会への信頼と、手仕事への誇りが溢れていた。象徴的次元での革命とは、こうした労働環境の実現と維持こそ指すべき言葉だ。

ブルデューのマネ論を批判

八六年、ボンピドゥー・センターでブルデューは、画家エドゥアール・マネを論じた。まったくのアドリブだったが、入場者多数で急遽大講堂に変更された会場は、沸きに沸いた。翌年『近代美術館手帳』にマネ論が発表された。スキヤンダルによって達成された視覚革命が、かつてそれ以前の視覚世界を覆い隠す逆

説を説き、話題を攫った。賛同とともに幾つか文献操作の短絡を指摘すると、ブルデューからは、信じられないほど率直な返事が来た。九四年一月二二日の私信には、ラシュデーイ訳者として暗殺された五十嵐一を巡る拙論への応答、晩年肝胆合い照らした廣松渉への哀惜に続き、「マネ論は(今しばらく?)諦めた」との告白。拙著『絵画の黄昏—エドゥアール・マネ没後の闘争』誕生の陰には、この手紙があった。私事偏重で恐縮だが、故人の手柄を伝えたかった。巡り会えた幸せを、今改めて噛み締めている。

(いなが・しげみ/国際日本文化研究センター)

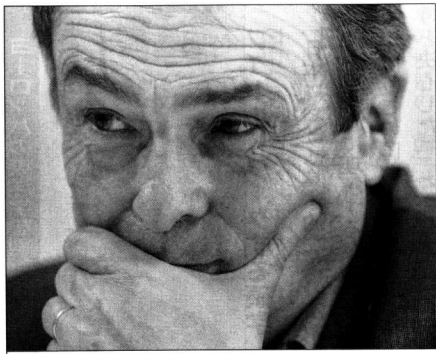
ピエール・ブルデュー

1930-2002

P・ブルデュー他

加藤晴久編

A5判 予三〇〇頁 予二八〇〇円



▲来日時のP・ブルデュー氏(2000年10月3日)